



学校法人 中央工学校
中央工学校 OSAKA
とぎわ
建築系 学科長 戸澤 まり子 様

Q1：はじめに中央工学校 OSAKA について教えてください。

中央工学校 OSAKA は、建築を中心とした工業系専門学校「大阪中央工学校」として、1981年に開校しました。以来、確かな知識と技術を有する人材を育成するための「厳しい実務教育」、豊かな社会性と創造力を有する人材を育成するための「人間涵養教育」をカリキュラム・ポリシーに掲げ、社会に役立つ人材を送り出すための教育活動に取り組んでいます。本校は1909年設立の中央工学校（東京都北区）のグループ校であり、教育・教科において交流を重ねています。

また、本校の校舎は東京都庁などの建築を手がけた世界的建築家・丹下健三氏の作品です。メタリックでモダンな曲線を描くチタン材を使った丸屋根やガラスブロックを使った斬新なデザインが特長で、他校の建築専攻の学生さんも見学することがあります。「校舎そのものが教材」といえる素晴らしい校舎です。

Q2：各科の詳細を教えてください。

設置学科は、2年制の建築学科・住宅デザイン科・インテリアデザイン科と2年制学科卒業後に進学する1年制の研究科、計4つの学科があります。

二級建築士資格の取得を目指し学習する研究科では、集中的に試験対策を行いますが、研究科に進む前段階である2年制の3学科では、デザインや建築の歴史など、学生が建築のやりがいを感じ、建築に対して夢を抱けるような科目も学びます。

建築学科では、建設会社や設計事務所で今や常識のBIM（Building Information Modeling）の習得や、相手に想いを伝えられるプレゼン力、建築技術者として必要な知識・技術と豊かな感性を身に付けます。

住宅デザイン科では、建築のなかでも「住宅」に特化し、基本的な建築の知識はもちろん、日本で最も多い木造住宅を中心に戸建て住宅の設計手法を主に学びます。

インテリアデザイン科では、家具や照明のスタイリングをはじめ、デザインやコミュニケーション、プロデュースなど、空間演出に必要なノウハウとスキルを身に付けます。

本校ではひとり1台ノートパソコンを支給していて、「ArchiCAD」や「Illustrator」、「Photoshop」の基本操作などを学んでいきます。

2年制の3学科は、入学後に約36,000㎡の広大な研究施設「軽井沢合宿研究所」での3泊4日の合宿研修が必修で、集団生活を通して社会人として大切な心構えや挨拶、ルールを学ぶことを目的とし、ともに学ぶ仲間や先生といろいろな体験学習を行いながらコミュニケーションを深めます。また、研究科では国内建築研修が必修で、グループ校である東京の中央工学校を訪問し、東京校の建築物や実験施設などで勉強をしたり、大手建築会社の研究所見学を行っています。

Q3：二級建築士の「学科」と「設計製図」を受験するための授業カリキュラムについて教えてください。

二級建築士の資格取得を目指す1年制の研究科では、9月に行われる設計製図の試験を目指して、夏休みはお盆の一週間のみで、それ以外は毎日授業を行っています。

学科試験のある7月第1周目の日曜日までは、製図の授業と模擬試験が週1回あって、あとの4日を学科Ⅰ（建築計画）・Ⅱ（建築法規）・Ⅲ（建築構造）・Ⅳ（建築施工）に振り分けるようなカリキュラムを組み、その1週間をずっと繰り返します。模擬テストは5・6回実施し、点数の推移を見ながら「苦手な科目でより点数を取るにはどうしたらよいか」といったアドバイスをしていきます。法規と構造の苦手な学生が多い科目は別途で補修を開くことも多いです。

設計製図試験に向けては、各学科1年生の時に学んだ手書き製図の書き方を改めて指導します。学習が進むにつれてCAD（コンピューター設計支援ツール）に移行することで手書きの感覚を忘れてしまうため、感覚を取り戻すために、もう一度手で線を書く練習をします。また、学科試験対策の授業の進捗に合わせて、法規科目で触れた注意点を抑えながら製図の指導をしていきます。

製図の試験課題が発表される6月からは、課題分析とそれに合わせた課題を繰り返し練習します。

学科試験終了後は、とにかく毎日製図に取り組みます。今年は製図の試験課題がRC造（鉄筋コンクリート構造）の年でした。RC造は、規模・形状・間取りを形成する基本計画のコツが木造と違うため、プランニングの練習を重点的に行いました。例えば、「階段とエレベーターはまず左上に入れる」といったパターンを理解するためのパズルゲームのような練習を行いました。実際に問題を解いてみると、梁をまたいだ位置に階段が来てしまっていたりするので、学生に定着させる難しさを感じました。

研究科の学生たちは、月・火は学校で学習して課題を持ち帰り、水曜日の自宅学習日にその課題を仕上げ、木・金はまた学校に登校して課題を提出し、先生のフィードバックをもらい、新たな課題を持ち帰ってそれを土・日で仕上げ、また月曜日に提出し、先生のフィードバックと新たな課題をもらう・・・というスケジュールの繰り返しで、2か月の間に約24課題を仕上げ、設計製図の試験に挑みます。



Q4：授業ではどのような教材を求めていますか？

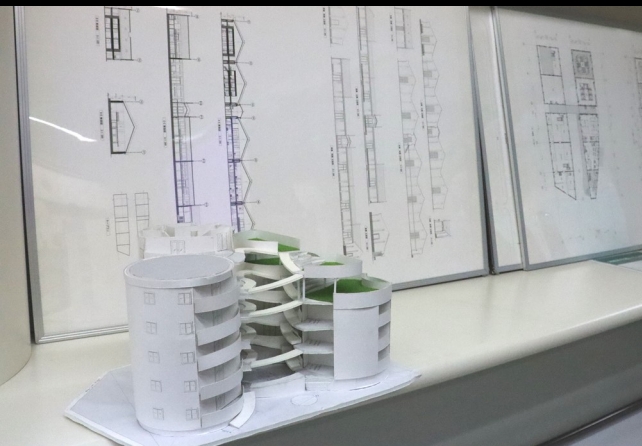
学生が自宅で復習や模擬テストの見直しをする際に、不明な点があった場合の確認として使えるものが、教科書として一番良いと考えています。授業では、ベテランの学科の先生が、流れをしっかりと考えたカリキュラムを用意しており、教科書を読みながら進行する形ではなく、プリント教材やパワーポイントなどの資料をメインで使用しながら単元を進めています。

授業中であれば不明な点は先生に質問できますが、学生がひとりで自宅学習する際はそうはいかないため、そのような時の疑問を解消する存在として、教科書があると良いと思っています。

TACさんの『二級建築士 学科新体系テキスト』は、図もわかりやすく、非常に使いやすいという声を学生や先生から聞いています。コンパクトで常に持ち歩ける点も良いようです。学校に置いたままにしている学生はひとりもおらず、家に持ち帰ってテキストを見ながら単語カードを作ったり、用語を覚えたりと、学生自身でいろいろ工夫して使っているようです。

問題集については、単元ごとに分かれた問題集を使用していますが、毎年問題数が足りないという意見が学生から出るため、法規などが変更になった問題を除いた過去問題集があればと思っています。

Q5：学生を指導するにあたり授業などで、工夫していること・苦労していることを教えてください。



建築士試験の受験は、「個人戦ではなく団体戦」であることを常に伝えていきます。学校が小規模で、2年制の3学科は、各学年120～130人しかいないため、全員知り合いという状況で、その中の2割ほどが研究科に進学しています。その人間関係を利用して、「〇〇さんが頑張りました」というコメントを送り合ったり、教室の中にそれぞれの目標や、友人へのエール、校長先生の激励の言葉などを教室に貼り出したりします。

学科試験の場合は模擬テストを5、6回やっているのでも、そこでトップだった学生や、一番伸びた学生に、お菓子などのご褒美を上げるなど、モチベーションを高めてもらえるよういろいろ演出しています。

また、試験直前には模擬テストの結果を貼り出し、成績が上がってきた学生には他の学生に向けて効果的だった対策を発表してもらうこともあります。「先生に聞くよりも学生同士で教えあったほうが理解できる」というチームができるこ

とで、試験の結果が大きく伸びる例をこれまでも見てきました。学科・製図それぞれの試験の前には、校長先生たちと壮行会なども開き、学生を送り出しています。

苦労している点については、最初は学科試験の建築施工で足切りされる学生が多く、教える難しさを感じています。学生は建築施工の現場を知らないため、教科書の内容を言葉で伝えても理解が難しく、スライドを駆使し、現場の写真など視覚的に伝える教材を授業に豊富に取り入れたところ、施工で足切りされる学生はいなくなりました。

今、施工管理の技術者の育成が業界の問題になっています。高校生はそもそも施工管理の仕事を知らないことが多いので、施工管理を目指して入学する学生はいません。大学では4年間建築を学ぶうちに施工管理の仕事の魅力に気づく学生もいますが、専門学校の2年間でそこまでのマインドチェンジは難しく、就職活動の段階でも設計志望です。設計は狭き門のため、就職できず落ち込んでしまう学生が多いです。そういった学生には、施工の仕事に興味を持ってもらえるようなきっかけがあればと思います。特に研究科の学生の中には大手ゼネコンに採用され、施工管理の仕事に就く学生が割と多いので、そういった学生が就職に向けて、意識の面で変われるような教材があれば面白いと思います。

また、昨年はコロナ禍があり、学生には週2回必ずリモートにするよう指導していました。今はそういった制限はせず、通学が怖いという学生にはオンラインで授業を受けることを許可していますが、オンラインに特化した授業ではないため、画面の向こうの学生がどんな表情をしているかこちらからは捉えづらく、難しさを感じています。

そういった非対面授業の影響は、二級建築士試験の結果にも現れ、コロナで登校ができず、オンラインで頑張っていた学生に試験の不合格者が多く出ました。学校にきていると、周りの雰囲気や盛り上がりを感じられるので、自分も頑張ろうという気合が入りぐっと最後に伸びるのですが、それが今年は沈んでしまった印象です。

Q6：学生の就職活動や卒業後の進路について教えてください。



学校全体では、地元密着型の住宅会社や建設会社に就職するケースが多いです。主な就職先は、建築学科の場合は、建設会社や設備会社、設計事務所などで、3分の1の学生が、研究科に進み二級建築士の資格取得を目指します。インテリアデザイン科は、店舗関係や店舗設計施工会社、住宅会社、設計事務所、店舗中心のデザイン事務所に就職します。

住宅デザイン科の学生は、住宅会社や設計の仕事を目指しているので、お客様に直接名刺をお渡しする際に、建築士の肩書が必要だということで、半分の学生が研究科に進学して二級建築士資格取得を目指します。

建築士の資格を持たないで住宅会社に就職すると、営業に回されたりして、お客さんの前に「設計士です」というように出してもらえないことも多くなります。そのため、研究科で建築士資格を取得した卒業生の就職先は、住宅会社や設計事務所が多くなっています。

Q7：建築士の受験資格が昨年度変更となりましたが、貴校ではどのような影響がありましたか？

今年の3月の卒業生で、さっそく一級建築士の合格を狙って二級建築士と一級建築士両方に受験を申し込んだ学生がいました。

そのような学生は、一級建築士の試験対策に絞って学習を行い、結果として一級建築士の合格には手が届かなくても全員二級建築士試験には合格することができました。

そのため、今年から研究科に進学した学生には、まず二級建築士・一級建築士の同時受験をアナウンスして、どれくらい関心を持つか様子を見るようにしています。

今後は、事前に模擬テストを行い、見込みがありそうな学生には、二級建築士・一級建築士両方の受験申し込みを促し、申し込んだ学生にはしっかりと試験に合格するための授業ができればと考えています。ニーズがあればクラスを設けることも視野に入れつつ、次年度はそのような形で指導をしていく予定です。

Q8：貴校の今後の展望について教えてください。

今、少子化で若い世代が減少している中で、専門学校の価値は何なのか、専門学校は何のためにあるのか、というところを改めてしっかりとアピールしていきたいです。

専門学校が実践するのは職業教育ではあるけれども、建築にはやはり人間力も必要です。ただ資格を取得するための勉強ではなく、建築を通して人間的に成長していけるような教育を実施する学校でありたいと考えています。



～インタビューを終えて～

今回のインタビューは、中央工学校OSAKA様に実際にお伺いしました。ラウンジで戸澤先生のお話をお聞きし、その空間が卒業生が手がけたものとお聞きして、建築の専門学校ならではの体感。インタビューの後は校舎を見学させていただき、丹下健三氏が設計された精緻な校舎の全貌や、在校生の若いエネルギーの溢れる作品をたくさん拝見して、とても学びのある取材となりました。お忙しいところ、取材をお引き受けいただきありがとうございました！